

何をやってきたんだろう

高校教諭 高橋秀典

37年間もこの仕事をしてきて(「因果な商売だね」とボヤきつづけて)、相変わらず、相撲で言うところの「なまくら四つ」、決め手に欠ける授業をしています。相手が生身のにんげんだから仕方ない部分も多々あるというものの、トホホ…。

悪名高き

教員になった年に共通一次試験(予め与えられている答えを時間内に選別する作業の強制)が始まりました。「あれから37年！」文科省の誘導(圧力)もあって、私立大学の入試にも組み込まれながら、センター試験という名称に衣替えして生き延びてきました。

いい反面教師に恵まれた(?)僕は、真の学力とは「問う力」だ、と思いつけることができました。「なんだろう、これは？」とか「どうして？」とか、立ち止まって考えようとするのが、学ぶことの本質だと思うのです。とくに、みんなが同じ方向に流されようとしている時には、立ち止まることに大きな力が要ります。

だから、僕は自分の授業の出来不出来を、生徒から問いが寄せられたか、の一点に絞って確認しています。とはいえ、授業の方法は、確立されているどころか、このトシになっても、「ど壺」にはまり込んでいます。(センセイ、「ど壺」ってなんですか?)

授業のすき間に一つの習慣

50分の授業は飽きます。いい若者がずっと席に着いているのはそもそも難しい。そこで、授業の中頃に「バンザイ」を皆でする習慣がいつの間にかできてしまいました。エッ、全員でバンザイ?

かたちはマズイですね。でも、両手をまっすぐ(伸ばした腕が耳に触れる程度まで)数回挙げると、自然と背筋が伸びて血の巡りが良くなります。

では、何に対してバンザイするのか?ここが

肝心で…平和を壊しかねない安倍政権に掣肘を加えているのが米国と天皇・皇后だという皮肉な構図があるからといって、まさか「〇〇バンザイ！」はしませんヨ。

スルーする彼ら

バンザイの対象は、生徒たちのよく知っている人だけでなく、「知って☆い人」を意識的に混ぜ込んでいます。最近では例えば、「さ～て、疲れてきたから、バンザイするよ。今日は遠藤保仁！なんで遠藤保仁か、わかる人？」生徒の大部分が手を挙げます(JリーグMVPへの関心はさすがに高い)。この挙手もほぐしの運動です。もしかすると、今日一日で、この一回しか手を挙げない生徒がほとんどかも…。

「今日はマララちゃんにバンザイしよう。なぜ、マララちゃんか、わかる人～」遠藤保仁よりも反応が鈍かったです。これが残念ながら現実、彼らの限界です。ノーベル平和賞受賞の翌日も、です。

新聞を定期購読していない家庭も増えていきます。ウェブのヘッドラインニュースをちらっと見て、興味関心のあるものだけにクリック、それ以外はスルーしてしまいます。日常生活でも、そんなスルーが多い！だからこそ、立ち止まる習慣、スルーしないで踏みとどまる一種の筋力をつける必要があります。

ことばの学習

ここで、マララちゃんが受賞演説の終盤で6回繰り返したフレーズ(Let this be the last time that～)を生徒に紹介してみました。「朝日新聞が『～は終わりにしよう』なんていう、マララちゃん

んっぽくないひどい日本語訳を載せてるんだけど、みんなだったら、もう少しマシな訳が出来るだろう？」という挑発(!)から始めましたが。

Let this be the last time that a boy or a girl spends their childhood in a factory. …

すると、「～は最後にして!」「～をやめて!」のほか、センスの光る「もういやだ」という訳も出ました。そうすると、「もうおしまい」も出てきます(「もうおしまい」というオジサンに響く語彙も持っているんだ!)

このマララちゃんへのバンザイタイムにそれほど時間はかかりませんでしたし、それなりに意味もあったと思います。

うたの喪失

60万人の若者の将来を左右してしまうセンター試験の解答に「揺れ」は禁物です。ですから、現代文分野からも古典分野からも、詩歌の出題がなくなりました。詩歌の読解は、読み手それぞれの人生観や自然観、世界観に照らしてみることによって初めて深まるからです。

素材として扱われることはありますが、現代文では評論の論旨を補強するために補助的に引用された詩歌でしかないし、古文では物語の登場人物たちが交わすコミュニケーションツールとしての和歌(心惹かれたり拒んだりすねたりの種類歌)です。漢文では、用いられる語句の意味を設問したり、対句や押韻のルールを確認したりするための穴埋め設問にほとんど限られ、感動の中心を避けているかのようです。

こうした傾向は高校の授業に大きな影響を与えてしまっています。「出ないもの」は、「やらない」のです。学校という装置が、今や効率化最優先になってきています。とにかく忙しい、でも結果は出さなければならない。もしもこれに予算配分という動機付けがもたらされれば、選択と集中は一段と加速してしまうでしょう。

古典の喪失

センター試験の古文には、「擬古物語」がよく出題されます。「擬古」とは、昔に似せた(いに

しえに擬した)という意味で、平安王朝を舞台にして鎌倉時代や室町時代につくられたたくさんの物語群を指します。いわば、平安パロディ物です。

なぜ、そのような物語が多く作られたのか？それは、和歌の傾向に即応しています。平安時代末期から、和歌は「新古今風」が一世を風靡しました。平安時代の物語世界を下敷きとして感慨を詠じるという手法が流行し、当時の歌人たちは平安時代の物語をよく読みました。また、散逸している物語を集めて校訂を加えたり改作したりしました。藤原定家は当代きっての物語コレクターでした。

また、武士の支配する社会になってしまった反動で、平安の貴族社会が追慕されたのかもしれない。

では、なぜセンター試験に「擬古物語」が出題されるかという、どの教科書にも載せられていないので、公平感が保障されるからでしょう。しかし、所詮はパロディです。面白さも平板です。言葉も、平安時代の微細な陰影を失ったパターン化が見られます。国を挙げてつまらないパロディをせっせせっせと読ませて、「古典を一生読まない若者」を育ててはいないか、と心配です。

「古典」とは繰り返し読み、そのたびに知恵や感動を汲みとれるものを言うのではないのでしょうか。誰でも知っていてこそその「古典」。しかし、それでは「点差のつく試験」にならないか!

以上、永年連れ添った(?)マークテストへの恨みつらみでした。(センセイ、つらみって何ですか?)

偉そうに書いてしまつてごめんなさい。この「上から目線」が直らないうちに教職を去ることになりそうです。トホホ。(センセイ、何回目のトホホですか?)



(書・小貴紘子)